東洋学報　第八十一巻第二号　平成十一年九月

論説

両漢交替期の黄河の決壊と劉秀政権

浜川　栄

はじめに

前漢末・平帝期と新・始建国三年（一一）に発生した黄河の二つの決壊は、いずれも後漢・明帝期の王景による治水工事[1]で修復され、始建国三年の決壊で生じた東寄りの新しい黄河河道（歴代二番目の河道変遷とされる）がそこで確定し、以後約千年にわたって安定を保ったことから、黄河変遷史上の特筆事項とされてきた（図1）。

しかしこの二つの決壊に関しては、いくつかの問題がこれまでほとんど検討されることなく残っていた。それは、平帝期の決壊が『漢書』に記録されておらず、発生から数十年後の後漢時代になって急に深刻な事態と認識され始めたこと、黄河の河道変遷をもたらすほど大規模であった始建国三年の決壊について被災記録がないこと、両者ともに王景の治水以前には全く対策が施された形跡がないこと、などである。そこで筆者は別稿においてこれらの点

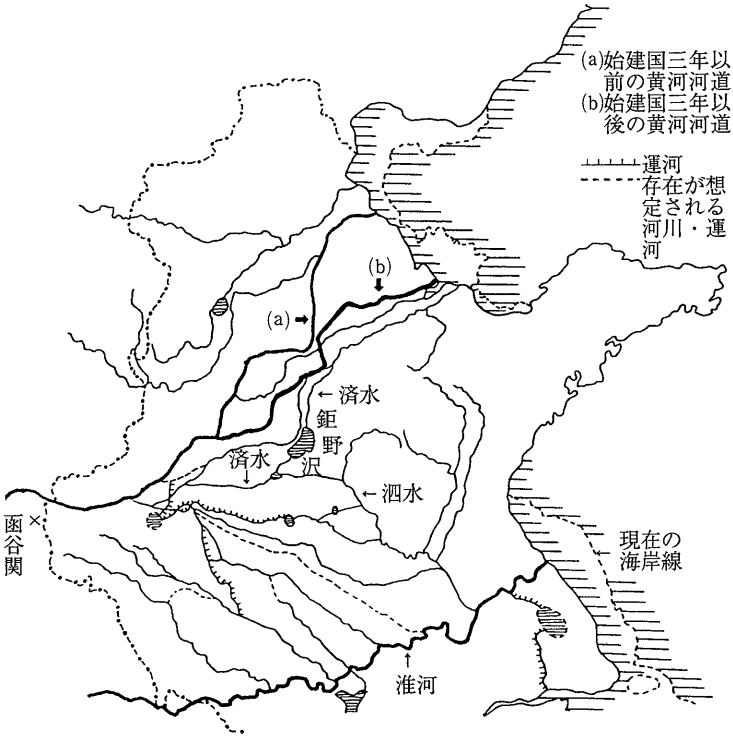


図1　両漢交替期黄河下流域主要水系図

について検討し、以下のような結論を得た。(2)

平帝期の決壊が『漢書』に記録されず、後漢になってから急に重大視され始めたのは、決壊発生から当分の間は淮北平野（黄河以南・淮河以北の平野部）の河川水路網の排水機能によって、また新・天鳳年間（一四～一九）以降は旱魃の頻発による水不足によって、国家的対策を要するほどの被害が発生しなかったためと考えられる。また二つの決壊とも長く放置されたのは、右のような状況に加えて、当時、災異説に影響された黄河放置論が為政者間に流行していたためでもあった。しかし、後漢時代になって次第に黄河の水量が回復するにつれ、特に平帝期の決

壊による、戦国時代以来の最重要経済地域である淮北平野の洪水被害が深刻になったため、ついに王景の治水が実施された。平帝期の決壊について『後漢書』等に詳しい記録が残されたのはそのためである。一方の始建国三年の決壊は、淮北平野に被害をもたらさなかったことと、東寄りの新河道を形成し、従来黄河の洪水を被りやすかった河北平野（黄河以北の平野部）の危険を軽減したことから災害として意識されにくく、その結果被災記録も残されなかったのである。そして王景の治水とは、そうした当時の状況から次第に顕在化してきた、黄河の洪水をめぐる河北平野・淮北平野の激しい利害対立をも解決したものであり、その意味でも評価されるべき偉業であった。

しかし、以上の考察で両漢交替期の黄河をめぐる問題がすべて解決したわけではない。黄河の決壊が六十年以上も放置され、大規模な河道変遷まで生じたこの時期は、同時に王莽による前漢王朝の簒奪、赤眉等の広範な農民反乱、諸群雄の抗争を経て、後漢王朝の体制が確立してきた時代である。この歴史の一大変動に対して、最重要経済地域である淮北平野が洪水被害にさらされ続けた事実が何の影響も及ぼさなかったとは考えがたい。しかしその影響については、従来ほとんど検討がなされていない。わずかにビーレンスタイン氏や木村正雄氏の論考があるが、それぞれ以下のような重大な問題を含んでいる。

ビーレンスタイン氏は、黄河の決壊こそが王莽政権崩壊の主因であるとする大胆な仮説を提示された。[3] すなわち、黄河の決壊により大飢饉が発生し、そのために赤眉等の農民反乱や豪族の蜂起が起こり、王莽政権が崩壊した、というのである。しかし、農民反乱の原因が黄河の決壊ではなく旱魃による飢饉であったことが明らかとなり、氏の仮説は根底から否定されるに至った。[4] また木村氏は、黄河の決壊の放置や連年の旱魃への無策の原因を国家的治水

灌漑機構の能力低下に求め、それに全面的に依存していた黄河下流域（氏のいわゆる「第二次農地」）の生産力が著しく低下したことにより赤眉等の農民反乱が発生し、王莽政権を崩壊させた、と解された。[5] しかし、この説もやはり黄河の決壊と飢饉を結びつける史料がないこと、さらには国家的治水灌漑機構に依拠した「第二次農地」こそ中国古代専制王朝の存立基盤とする氏の持論そのものに多くの疑問が提示されたことからも、[6] 大方の賛同が得られているとは言い難い。

要するに、両漢交替期の黄河の決壊と当事の社会との関係についてはほとんど明らかにされていないのである。拠るべき史料は確かに極めて乏しい。しかし、その少ない史料を先学とは異なった視点から検討することで、まだ新しい見解を示しうる可能性は残されていると思われる。本稿はそうした問題意識からなる一試論である。

一、淮北平野における赤眉の動向

まず、農民反乱集団・赤眉の黄河下流域における行動について検討してみたい。それにより、当時の黄河下流域（特に淮北平野）の状況が見えてくるはずである。

山東半島の莒でわずか百人余の手勢を率いて挙兵した赤眉のリーダー樊崇は、泰山に拠って一年ほどの間に一万人を越える集団を形成し、故郷の莒を包囲したが、陥落させることができなかった。その後しばらく山東半島を荒し回り、集団が十万余に膨れ上がったところで再び莒を囲んだが、やはり落とすことができなかった。[7] ここから赤眉集団は一気に淮北平野に進出し、大規模な「寇掠」を行うのである。

赤眉遂に東海に寇し、王莽の沂平の大尹と戦いて敗れ、死者数千人。乃ち引去し、楚・沛・汝南・潁川を掠し、還りて陳留に入り、魯城を攻抜し、転じて濮陽に至る。

（『後漢書』巻一一劉盆子列伝）

赤眉集団の淮北「寇掠」の時期は新・地皇三年（二二）から翌更始元年（二三）にかけてであり、このわずかの間に楚・沛・汝南・潁川・陳留・魯・濮陽という淮北の主要都市を一気に荒し回ったことになる（図2）。この時、いわゆる「豪族」等の在地勢力の抵抗を受けたという記事は一切ない。しかし、赤眉は他の地域では常に在地勢力の強い抵抗を受けている。山東半島では前述のように樊崇の郷里・莒においてすら激しい抵抗を受けたし、淮北侵略後に進出した関中においても次のように頑強な抵抗を受けているのである。

時に三輔大いに飢え、人相食み、城郭皆空にして、白骨野を蔽う。遺人往往にして聚りて営保を為り、各々堅く守りて下らず。赤眉、虜掠すれども得る所無し。

（『後漢書』巻一一劉盆子列伝、建武二年〔二六〕）

第五倫、字は伯魚、京兆の長陵の人なり。……王莽の末、盗賊起こるや、宗族・閭里、争い往きて之れに附く。倫乃ち険に依りて固く営壁を築き、賊有らば輒ち其の衆を奮厲し、彊を引き満を持して以て之れを拒めば、銅馬・赤眉の属の前後数十輩、皆下す能わず。

（『後漢書』巻四一第五倫列伝、以上傍線筆者）

ここに見える「営保」「営壁」とは、県城等の既存の施設とは別に築かれた一種の「とりで」である（「営塹」「屯聚」等とも称する）。当時、在地の有力者たちが一族郎党・近隣を指揮してこうしたとりでを築き、そこにたてこもって他集団の襲撃を防いだ例が多数見られることは、すでに金発根氏や土屋紀義氏により明らかにされている。[8] しかし、それは必ずしも豪族クラスにのみ見られた方法ではない。赤眉と同様の農民反乱集団である五校に関しても、[9]

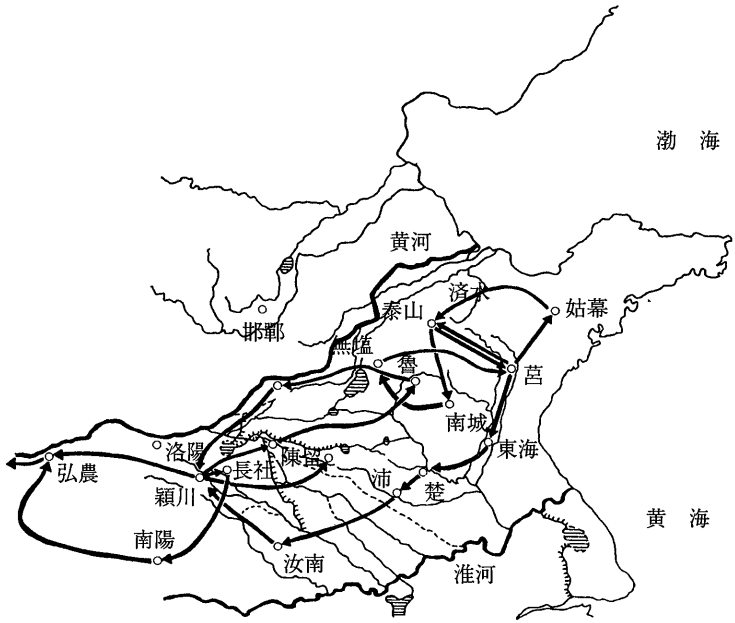


図2　淮北平野における赤眉の移動

（谷川道雄・森正夫編『中国民衆叛乱史』1、平凡社東洋文庫、1978、P44および郭沫若主編『中国史稿地図集』上冊、地図出版社出版、1979、P37～38をもとに作成）

河北平野における次のような記事が見える。

杜茂、字は諸公、南陽の冠軍の人なり。……建武二年、……中郎将の王梁と五校の賊を魏郡・清河・東郡に撃ち、悉く諸営保を平らげ、其の持節の大将三十余人を降す。

（『後漢書』巻二二杜茂列伝、傍線筆者）

土屋氏はここに見える「諸営保」を魏郡・清河郡・東郡の豪族層のものと解されている[10]が、注に引かれた『続漢書』では「其の持節の大将三十余人を降す」の部分が「其の渠帥大将軍杜猛・持節光禄大夫董敦等を降す」となっており、農民反乱の指導者の通称である「渠帥」を降したことになっている点からも、この

「諸営保」は五校のものと解すべきである。[11] 五校がとりでを築いていたことは次の史料からも証される。

王梁、字は君厳、漁陽の要陽の人なり。……（建武）三年春、転じて五校を撃ち、追いて信都・趙国に至りて之れを破り、悉く諸屯聚を平らぐ。（『後漢書』巻二二王梁列伝、傍線筆者）

ここで王梁が撃った五校と「諸屯聚」を別個の集団とみなすことは困難である。「諸営保」「諸屯聚」が農民反乱集団側にも見られたことは明らかであろう。[12]

また次の史料から、辺境の異民族の間にも同様の施設が多数築かれたことがわかる。

初、王莽の世、羌虜の多く背叛するや、隗囂、其の酋豪を招き懐け、遂に用と為すを得。囂の亡びて後に及び、五谿・先零の諸種、数々寇掠を為し、皆営塹して自守す。州郡、討つ能わず。（『後漢書』巻一五来歙列伝）

以上のように、戦乱が続いた両漢交替期にはさまざまな社会集団が「営保」等のとりでを築いて他集団からの攻撃に備えたのである。その多くは金氏や土屋氏の指摘されたように豪族層のものといえる（表1・図3）が、それらはあくまで史料に残った例であり、実際には各地で普遍的に見られた現象であった可能性が高いと言えよう。したがって当然、「営保」等は淮北平野にも存在したと考えられるし、それらしい記事もある。

夏恭、字は敬公、梁国蒙の人なり。……王莽末、盗賊従横し、郡県を攻没す。恭、恩信を以て衆の附する所と為るや、兵を擁して固守し、独り安全たり。（『後漢書』巻八〇上・文苑〔夏恭〕列伝）

虞延、字は子大、陳留東昏の人なり。……長ずるに及びて、長八尺六寸、要帯十囲、力は能く鼎を扛ぐ。少くして戸牖の亭長と為る。……王莽末、天下大乱するや、延、常に甲冑を嬰し、親族を擁衛し、鈔盗を扞禦し、

表1　両漢交替期の「営保」「営塹」等の例
（●＝複数の存在が想定される例。▲＝個人による例。◎＝存在が確認しきれない例。）

	地域	場所	時期	史料	出典（巻数のみは『後漢書』）	分類
1	三輔	長陵（京兆尹）	王莽末	（第五）倫乃依険固築営壁、……	巻41第五倫列伝	▲
2	三輔	茂陵（右扶風）	更始帝時	強宗右姓各擁衆保営、……	巻31郭伋列伝	●
3	三輔		建武1（25）	三輔郡県営長…百姓保壁、由是皆復固守。	巻11劉盆子列伝	●
4	三輔	栒邑（左馮翊）	建武1（25）	（鄧）禹所到、撃破赤眉別将諸営保、…	巻16鄧禹列伝	●
5	三輔	長安（京兆尹）	建武1（25）	転攻諸営保、……	巻38張宗列伝	●
6	三輔		建武2（26）	時三輔…遺人往往聚為営保、各堅守不下。	巻11劉盆子列伝・後漢紀巻4	●
7	三輔	宜陽・回谿阪（弘農）	建武3（27）	諸営保数万人……	巻17馮異列伝	●
8	三輔	藍田（京兆尹）	建武3（27）	諸営保守附（延）岑……	巻17〃	●
9	三輔	陳倉（右扶風）	建武4（28）	営保降者甚衆。	巻17〃	●
10	蜀		建武11（35）	郡邑復更保聚、観望成敗。	巻18臧宮列伝	●
11	南陽	湖陽	王莽末	（馮）魴乃聚賓客招豪傑作営塹…故能拠営自固。	巻33馮魴列伝	▲
12	南陽	湖陽	更始帝時	与宗家親属作営塹自守、……	巻32樊宏列伝	▲
13	河南	緱氏	王莽末	宗族老弱在営保間、（周）堪常力戦陥敵……	巻79下周沢列伝	▲
14	河南	成皐	建武1（25）	南下河南成皐已東十三県、及諸屯聚、皆平之	巻17馮異列伝	●
15	趙・魏		建武1（25）頃	時趙・魏豪右往往屯聚、……	巻77李章列伝	●
16	清河		建武1（25）頃	清河大姓趙綱遂於県界起塢壁、……	巻77〃	▲
17	魏・清河・東郡		建武2（26）	撃五校賊於魏郡・清河・東郡、悉平諸営保……	巻22杜茂列伝	●
18	河内	脩武	建武2（26）	及河内脩武、悉破諸屯聚。	巻18呉漢列伝	●
19	河間・漁陽		建武4（27）頃	詔（王）常北撃河間・漁陽、平諸屯聚。	巻15王常列伝	●
20	陳留	東昏	王莽末	（虞）延常嬰甲冑、擁衛親族、扞禦鈔盗、…	巻33虞延列伝	◎
21	梁	蒙	王莽末	（夏）恭以恩信為衆所附、擁兵固守、独安全。	巻80上夏恭列伝	◎
22	汝南	汝陽	王莽末	（周）嘉乃擁（何）敞、以身扞之。	巻81周嘉列伝	◎
23	北地		建武6（30）	北地営保、按兵観望。	巻17馮異列伝	●
24	安定・北地		建武9（33）	安定・北地諸営保、皆下之。	巻19耿弇列伝	●
25	隴西地方		建武9（33）後	五谿・先零諸種数為寇掠、皆営塹自守、……	巻15来歙列伝	●
26	江南地方	簡陽	建武初年頃	由是諸営壁悉降。	巻26趙憙列伝	●

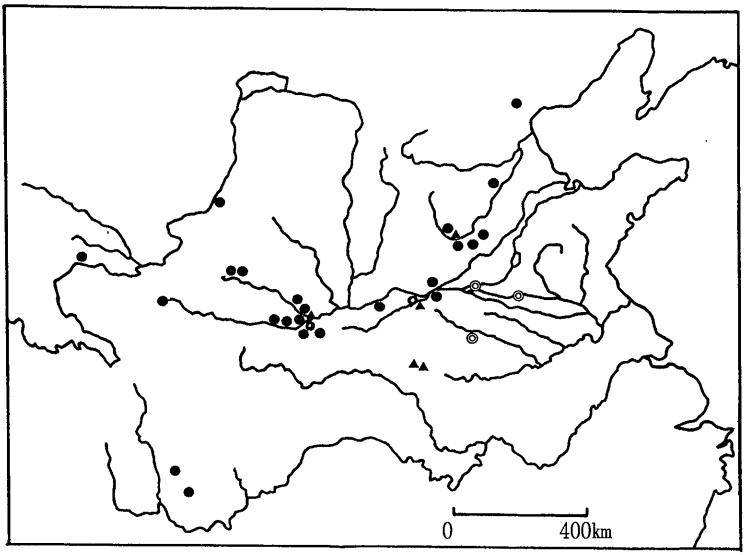


図3　両漢交替期の「営保」「営塹」等の所在地

其の全きに頼る者、甚だ多し。

（『後漢書』巻三三虞延列伝）

周嘉、字は恵文、汝南安城の人なり。……嘉、郡に仕え主簿と為る。王莽末、群賊汝陽城に入るや、嘉、太守何敞に従いて賊を討つ。敞、流矢の中る所と為るや、群兵奔り北げ、賊の囲繞すること数十重。白刃交も集まれば、嘉、乃ち敞を擁し、身を以て之れを扞ぐ。

（『後漢書』巻八一独行〔周嘉〕列伝）

又、南して河南・成皐已東の十三県及び諸屯聚を下し、皆之れを平らぐるや、降る者十余万。

（『後漢書』巻一七馮異列伝、建武元年〔後二五〕。以上、傍線筆者）

しかし、はじめの夏恭と虞延の例は、果たして「営保」等によって親族や近隣を守った例なのかわからない。虞延の例などは「長八尺六寸」「力は能く鼎を扛ぐ」という肉体的資質のゆえに「親族を擁衛し、鈔盗を扞禦」す

ることができた、という文脈になっており、前掲の「営保」等の記事とは趣を異にしている。[13] また周嘉の例は太守を助けて県城を死守した例であり、県城以外の地に「営保」等を築き自衛した例とはいえない。[14] また夏恭の記事に「独り安全たり」とあるように、はじめの三例はいずれも個人単位の自衛の例であり、河北や関中の「諸営保」等という表現から想定されるような、自営集団の広範な広がりと連携は全く看取されない。一方、馮異列伝の記事には「河南・成皐已東の十三県及び諸屯聚」とあり、県城とは別に「諸屯聚」が見えるが、実際には河南郡（後漢では河南尹）の洛陽周辺だけで「十三」という県の数は満たされてしまうのであり、[15]「諸屯聚」も県城からそれほど遠くにあったわけではなかろうから、せいぜい洛陽近辺の限定的な状況を示した例と考えざるをえない。要するに、淮北平野には「営保」等の明らかな例がなく、他地域に見えるような自衛集団の広範な展開は確認できないのである。

しかし、これは奇妙な現象と言わざるをえない。両漢交替期のみならず、前・後漢全時代を通じて淮北平野は豪族層の成長が最も顕著な地域であった。[16] 当然、赤眉の「寇掠」に対して豪族層による多数のとりでが築かれたはずであろうし、また赤眉によっても築かれたであろう。「営保」等は、まさしく淮北平野でこそ顕著に見られるべき現象なのである。ところが、実際にはそうした例が皆無に近いのは一体なぜであろうか。

二、淮北平野における在地勢力の動向

淮北平野には、実は「営保」等とは全く対照的なエピソードが散見する。

梁国の車成、字は子威。兄の恩都、赤眉の賊の得る所と為る。之れを臠せんと欲するに、成、叩頭して曰く、「兄は瘦せ我は肥ゆ。之れに代わるを得んと欲す」と。賊其の義に感じ、俱に之れを放つ。

（謝承『後漢書』巻三車成伝）

梁の車成は、兄が赤眉に捕まり、今にも「臠（切り身）」にされそうになった時、肥えた自分の身とひきかえに兄の命を救けてくれと赤眉に哀願した。赤眉はその兄思いの心情に打たれ、二人とも解放した、というのである。次も全く同様の史料である。

時に汝南に王琳巨尉有り、年十余歳にして父母を喪う。……弟の季、出でて赤眉に遇い、将に哺する所と為らんとするに、琳自ら縛し、季に先んじて死せんことを請う。賊矜みて放遣す。是れに由りて名は郷邑に顕わる。

（『後漢書』巻三九趙孝列伝）

次の二例も、赤眉かどうかは不明であるが、同様の「賊」に捕らえられた家族を我が身を犠牲にして救おうとし、「賊」の感銘をさそって解放された、という同様の記事である。

劉平、字は公子、楚郡彭城の人なり。本の名は曠なり。……王莽の時郡吏と為り、菑丘の長を守りて、政教大いに行わる。……更始の時、天下乱れ、平の弟仲、賊の殺す所と為る。其の後、賊復た忽然として至れば、平、其の母を扶侍し、奔走して難を逃る。……平、朝に出でて食を求むるに、餓賊に逢い、将に之れに亨られんとす。平叩頭して曰く、「今旦老母の為に菜を求む。老母、曠を待ちて命を為す。願わくば先に帰るを得、母に食らわし畢らば、還りて死に就かん」と。因りて涕泣す。賊其の至誠を見、哀れみて之れを遣る。平、還り、

既に母に食らわし訖ればば、因りて白して曰く、「属して賊と期す。義、欺く可からず」と。遂に還りて賊に詣る。衆皆大いに驚き、相謂いて曰く、「常に烈士を聞くに、乃ち今之れに見る。子去れ、吾ら子を食らうに忍びず」と。是ここに於いて全きを得。

（『後漢書』巻三九劉平列伝）

趙孝、字は長平、沛国蘄の人なり。父の普、王莽の時田禾将軍と為り、孝を任じて郎と為す。……天下乱るるに及び、人相食む。孝の弟の礼、餓賊の得る所と為る。孝之れを聞くや、即ち自ら縛して賊に詣り、曰く、「礼は久しく餓えて羸瘦なり、孝の肥飽なるに如かず」と。賊大いに驚き、並びて之れを放ち、謂いて曰く、「且く帰り、更めて米糒を持ちて来たるべし」と。孝求むれども得る能わず、復た往きて賊に報じ、亭に就かんことを願う。衆之れを異とし、遂に害さず。

（『後漢書』巻三九趙孝列伝）

もちろん、これらの記事が列伝中の人物の孝心を強調する目的で書かれたことは明らかであり、そのための誇張や潤色が施された可能性は否定できない。しかし、そうした疑いを払拭するだけの真実味が要求されるからこそ、「いつ・どこで・誰が」という基本的な事実関係についてはむしろ正確な情報を伝えていると考えられる。したがって、これらは当時の淮北平野の状況を伝える史料として十分吟味に値するといえよう。

そこで、まず注目すべきは場所である。梁・汝南・楚・沛、いずれも淮北平野の主要な地域であり、赤眉が「寇掠」した場所に当たっている（図2）。次に注目すべきは、「孝」を発揮した人々の無力さである。いずれも赤眉や「賊」に対して抵抗するだけの物理的・経済的能力を全く示していない。楚の劉平・沛の趙孝などは、王莽政権期にそれなりの官職を勤めており、人望もあったようであるから、当時にあっては「営保」のひとつも築いて親族・

近隣を保護してしかるべき人物であり、少なくとも「賊」に容易に家族を捕捉されるような境遇にはなかったはずである。しかし、実際は「賊」に対抗できる力を全く持っておらず、たまたま異常な孝心を発揮して運良く難を免れたに過ぎないのである。したがって、本来彼らと同程度の地位・勢力を有しながら、彼らのような幸運に恵まれず、「賊」に捕食されてしまった例も多かったと想像できる。また、「賊」がいずれも人肉食を試みようとしており、親族を救おうとする側も他の物品・食料等ではなく、我が身をひきかえに提供しようとしている点にも注目される。当時、「賊」側・在地勢力側とも食料さえ事欠く状態にあったことが看取されよう。

しかし、前後漢を通じて豪族の成長が著しい淮北平野において、「営保」等を築いて赤眉等に対抗した例が見えないのみならず、むしろ在地勢力の無力さを示すような記事が集中的に見られるのはなぜであろうか。[17] 土屋氏は、赤眉が短期間に淮北平野全域を「寇掠」しえたのは、むしろ在地勢力の抵抗が激しいために一箇所に留まることができず、抵抗の手薄な地域に移動を余儀なくされたためと推測されている。[18] 赤眉が淮北平野で人肉食を試みている記事を、「賊」側の窮乏のみを示したものと解するならば、在地勢力側が防御を固めていた証左と見ることもできよう。しかし、実際には在地勢力側も飢えていたのであり、むしろ「賊」側以上に窮乏していたと思われる記事しか見えない。また、赤眉が在地勢力の抵抗のために移動を余儀なくされたのであれば、移動中に勢力を減じていったはずである。しかし、赤眉は淮北「寇掠」を終えた時点で、樊崇ら渠帥二〇余人が更始帝（劉玄）から列侯に封じられている。この時期の列侯封爵にどれほどの実質的意味があったかは別として、もし赤眉が淮北平野を「寇掠」する過程で勢力を減じていたのであれば、更始帝があえて樊崇らを封爵したとは考えにくい。淮北平野「寇掠」により赤

眉がさらに勢力を拡大し、速やかにそれを慰撫する必要が生じたためにとられた処置と考えるべきであろう。事実、列侯にはなったものの領地を得られなかった樊崇らは直ちに離反し、潁川・河南に入って更始帝の軍を次々撃破していくのであるから、赤眉の勢力が淮北「寇掠」によって拡大しこそすれ、いささかも減じたとは思えない[19]。やはり淮北平野においては赤眉に対する在地勢力の抵抗はほとんどなかったのであり、無人の地を行くごとく「寇掠」できたために短期間での大移動が可能になったと解すべきであろう。

ここから考えられるのは、赤眉が侵入し始めた地皇三年（二二）以前に、淮北平野には赤眉に対抗できるだけの在地勢力がすでに存在していなかったのではないか、ということである。このことは、黄河下流域をめぐる劉秀と劉永の覇権争いの過程からも想定できる。

三、河北平野と淮北平野の差異——劉秀と劉永の対比を通じて

王莽滅亡（二三）後、各地に割拠した群雄[20]のうち最終的には劉秀が台頭して後漢王朝を確立していくが、漢王朝の復興が群雄の一応の建て前であった[21]ことを考えるとき、劉氏の血統という点では劉秀よりもはるかに優利な立場にあった劉永が覇権を握れなかったことは注目に値する。

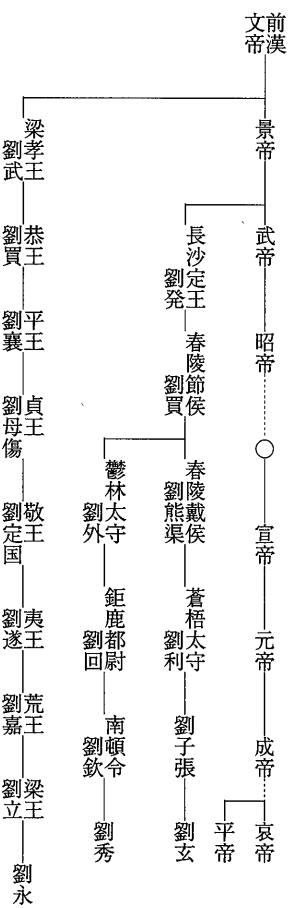
劉永は前漢・景帝期に富強を誇った梁の孝王の八世の孫であり、劉秀・劉縯（劉秀の兄。劉玄に殺された）兄弟や劉玄（更始帝）など漢王朝復興を唱えて挙兵した諸劉氏の中でも最高の血筋であった（図4）。当時の劉氏の血統の重要性は、王郎なる人物が前漢・成帝の子と詐称することで河北の多くの豪族の支持を集め、劉秀の河北平定の最

大の障害となったことからもわかる。[22] このことから見れば、梁の孝王八世の孫であり、河北以上に豪族の多い淮北平野にあって、しかも要地・睢陽に拠っていた劉永は、当然相当な勢力を築き得たであろうし、全国制覇の可能性も十分あったはずである。

ところが、劉永は更始元年（二三）、血統の劣る更始帝・劉玄により梁王に封じられ、初めて歴史の表舞台に登場する。[23] それ以前の動きは史料に何も見えないので、一定の勢力を築いていたとは考えにくい。なぜ劉永は更始帝から封建されるまで何もしなかったのか。あるいは行動は起こしたものの勢力を築きえない事情でもあったのか。

これらの疑問を解明するために、以下、梁王となって以降の劉永と、河北に進出した劉秀の行動とを比較検討し

図4　劉秀・劉玄・劉永関係系図（……は直系でない関係）



てみたい。劉秀は更始帝の命により、わずかな手勢のみ率いて河北平定に乗り出した。一方の劉永も同時期に梁王に封じられ、ほぼゼロの状態から淮北で地盤作りを始めている。したがって、両者は黄河を挟んで同時に勢力拡大を始めたライバルと見なしうるし、事実のちに黄河下流域全域の覇権を争うことになるので、この両者を対比させることによって、当時の河北と淮北の状況の違いも確認できるからである。

劉秀は更始元年（二三）十月、故郷の南陽を遠く離れて初めて河北に入った。その時点では信頼できる南陽出身者が朱祐一人というはなはだ心もとない陣容であった。[24] 邯鄲を過ぎて真定に向かったころ（更始元年一二月）、王郎が邯鄲で即位し、周辺の郡国を支配下に納めた。この時点で劉秀は王郎によって洛陽の更始帝勢力との交通を分断されたのである。劉秀はそのまま北上し薊県（現北京）に達するが、薊県が王郎側に通じたため入城できず、やむなく南下に転じた。この南下行は、「邯鄲の使者」（つまり王郎の使者）と偽ることでようやく糧食を得たり、霜雪に悩まされ、凍った川を薄氷を踏んで渡ったり、道に迷って途方にくれたりなど、困難を極めたものであった。ようやく信都に落ち着き、そこを拠点に四千の兵を派遣して堂陽・貫県を降すと、次第に邳彤・耿純・劉植など河北の豪族が劉秀に味方するようになった。その後は順調に中山・鉅鹿・常山などの郡国を降し、豪族の協力をさらに得つつ、ついに更始二年（二四）四月に邯鄲を囲み、翌月王郎を誅した。ここで更始帝から蕭王に封じられ、帰還を命じられるが、河北平定の途中であることを理由に拒否し、事実上更始帝と袂を分かつ。その後は河北を侵略していた銅馬・大彤・高湖・重連・尤来・大搶・五幡などの農民反乱集団を巧みに吸収して勢力を拡大し、[25] 更始二年（二四）六月、ついに帝号を称し、十月には洛陽を降して遷都した。[26]

一方、劉永は父祖以来の地元である睢陽を拠点に、沛の周健ら淮北平野の在地勢力と連携していった。

永、更始の政の乱るるを聞き、遂に国に拠りて兵を起こす。弟の防を以て輔国大将軍と為し、防の弟の小公を御史大夫とし、魯王に封ず。遂に諸々の豪傑、沛人の周建等を招き、並び署して将帥と為し、済陰・山陽・沛・楚・淮陽・汝南を攻め下し、凡そ二十八城を得う。

（『後漢書』巻一二劉永列伝、更始二年（二四））

さらに山陽郡の佼彊・東海郡の董憲・斉国の張步と手を結び、ついに天子を自称する。

又使を遣わして西防の賊帥の山陽の佼彊を拝して横行将軍と為す。是の時、東海の人董憲、兵を起こして其の郡に拠る。張步も亦た斉の地を定む。永、使を遣わし憲を拝して翼漢大将軍、步を輔漢大将軍とし、与に共に兵を連ね、遂に東方に専拠す。更始の敗るるに及んで、永、天子を自称す。（同右・劉永列伝、更始二年（二四））

しかし、木村正雄氏も指摘されたように、劉永が獲得した県城は攻め入った済陰・山陽・沛・楚・淮陽・汝南の六郡・六二県中、わずか二八県に過ぎなかった[27]。つまり、淮北全体を面的に支配できたのではなく、せいぜい都市と都市を結ぶ点と線を押さえたに過ぎない。また、劉永にくみした人物を見ると、張步と董憲は劉永の本拠地・睢陽からかなり隔たった位置におり（図5）[28]、しかも二人とも一度も劉永と軍事行動をともにしなかった。董憲は劉永の死後、子の劉紆に協力するが、張步は結局一度も劉永父子と行動をともにしなかったのである。劉永が董憲を翼漢大将軍、張步を輔漢大将軍に任じたとはいっても、三者の連携がほとんど名ばかりのものであったことは明らかであろう。

一方、劉永が横行将軍に任じた佼彊は睢陽にほど近い山陽郡に拠っており、積極的に劉永と行動をともにしてい

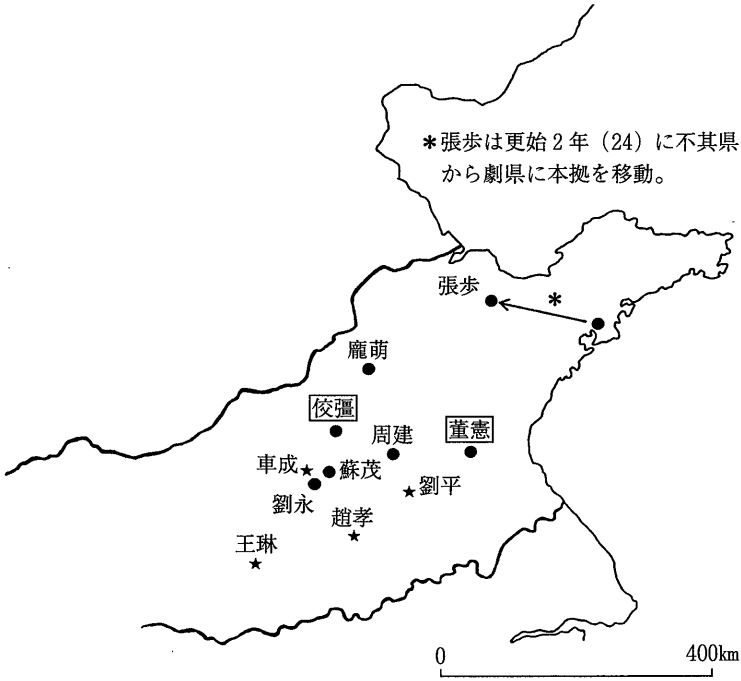


図５　淮北平野において「孝」により赤眉（賊）から逃れた例・劉永与党分布図
（★＝「孝」により赤眉（賊）から逃れた例。●＝劉永の与党。
□＝農民反乱集団出身者）

る。しかし木村氏も指摘されたとおり、[29] 佼彊はかつて農民反乱集団にいた人物であり、当然いわゆる豪族層ではないので、山陽郡の在地勢力の代表とは考えにくく、長期にわたって劉永が頼れるだけの人的・経済的地盤を有していたとは思えない。実は董憲もかつて赤眉に属していた可能性があり、[30] それが事実とすれば、やはり在地に根ざしていない脆弱な勢力に過ぎなかったものと考えられる。

しかし、劉永側にはのちに劉秀側から蘇茂・龐萌という人物が寝返ってきた（龐萌は劉永の死後、劉紆に降ってきた）。彼らは劉永側の強力な支持者となり得たのであろうか。蘇茂はもともと更始帝に仕え、更始帝が長安に遷都した後の洛陽を

守っていたが、劉秀に敗れて降り、その後、劉永攻撃を命じられて出陣したが、軍中の不和により劉永側に寝返った（建武二年〔二六〕[31]）。その際「掠して数県を得」てはいるが、以上の経緯から見て、蘇茂が強力な軍事的・経済的力量を保持して劉永側についたとは考えられない。

一方、龐萌は劉秀から「社稷の臣」と厚く信頼されていた人物であったが、些細な行き違いから突然劉紆側に寝返ってきた（建武五年〔二九〕[32]）のであり、これも大軍を伴っての帰順とは思われない。それどころか、当時すでに劉秀に大勢が帰しつつある中での龐萌の寝返りは、激怒した劉秀による親征を招くなど[33]、劣勢の劉紆側にとって一層危険な事態をもたらすことになった。その結果、建武五年（二九）七月には劉紆が殺され、翌建武六年（三〇）には董憲・龐萌らも斬られ、淮北平野は劉秀の手に帰したのである。蘇茂や龐萌が劉永・劉紆側に帰したのは劉永父子の血統の力のためと考えられるが、それが実際の勢力拡大にはつながらなかったことは以上の経過から明らかであろう。

このように見てくると、劉永・劉紆側が淮北平野で築きえた勢力は、劉秀が河北で築いたそれに比べて極めて脆弱なものであったと言わざるをえない。

河北と淮北を比較した場合、人口や経済力など多くの点で、戦国時代以来ほぼ一貫して淮北が優位にあったと考えられる[34]。顕著な豪族層の成長もその証左となろう。『漢書』地理志によれば、前漢末・平帝期には特に淮北優位の状況が明らかである。ところが、両漢交替期の農民反乱に対する豪族層の抵抗は、河北では瀕見するのに、淮北では皆無に近い。河北豪族層は当初劉秀をも苦しめたが、後には劉秀の勢力の礎ともなった。しかし、劉永に対し

て淮北豪族層は、積極的な抵抗も協力も見せていないのである。

あるいは、王莽政権期に淮北の優位性が失われるような事態が発生したのであろうか。例えば、王莽政権期には旱魃が頻発したが、それは全国的な現象であり、[35] 淮北でのみ多かった証拠はない。また、淮北は赤眉による広範な「寇掠」を受けたが、河北も同時期に銅馬・大彤・高湖などによる大規模な「寇掠」を受けており、やはり状況は同じである。したがって、劉秀と劉永が地盤作りを始めた更始元年（二三）の時点でも、淮北の優位性に変化はなかったはずである。さらに血統や地元に拠った地の利等も考慮すると、劉永の方が有利な立場にあったことは明らかである。しかし、歴史は全く逆に展開したのである。

もちろん、劉永の個人的資質に問題があった可能性も考えられる。劉永の性格や能力に関する記録は一切残っていないが、その行動を見る限り、確かに劉秀ほどの才覚はなかったようである。しかし、『後漢書』等現存する史料に劉秀賛美の傾向が強く見える以上、両者の能力差を安易に判断することはできない。ここで更始帝・劉玄について見ると、『後漢書』による限り、人品・能力とも劉秀に比して明らかに劣った人物として描かれている。[36] 何も書かれていない劉永は、劉玄よりはまともな人物であったと言えようか。しかし、その無能な劉玄から梁王に封じられるまで、劉永が行動を起こした記録がない点はやはり不可解である。劉永の資質や挙兵の意図の有無に関わらず（梁王となった後の積極的な行動から見て、それ以前に挙兵の意図がなかったとは考えがたいが）、彼の血統の影響力を周りが放っておいたとは思えない。梁王となる前の劉永は、何もしなかったのではなく、挙兵はしたが大した勢力を築けなかった、というのが実態なのではなかろうか。こうして見ると、劉永敗退の主因はやはり淮北平野そのもの

にあったと考えるべきであろう。

では、王莽政権末期から後漢成立期の間に限り、淮北平野の優位性を失わせた要因とはいったい何か。それはやはり、両漢交替期に発生した黄河の決壊なのではなかろうか。史料には見えないが、長期間放置された決壊は淮北平野に洪水被害をもたらし続け、徐々にその優位性を奪っていったと考えられる。その状況を想定してみよう。

前漢最末期に発生した黄河の決壊は、おそらく淮北の発達した水路網の排水機能により、当初は中央政府に対策を迫るほどの被害をもたらさなかったようである。しかし、国家的治水対策が全く検討されなかったわけではない（『漢書』溝洫志に、黄河の治水に関する大規模な議論が平帝期に行われたことが見える）[37]。したがって、この間淮北平野に全く洪水被害がなかったわけではなく、前漢・武帝期の瓠子における黄河の決壊の時と同じように徐々にそれが拡大していき、やがては水路網の排水機能も麻痺し、地方レベルでは対応できない状態になっていったと考えられる[38]。しかし、内外に問題を抱えて動揺する王莽政権にはもはや治水の実施は期待できない。したがって、淮北平野には武帝期と同様に大量の流民が発生したことであろう。その多くは貧しい弱者であったろうが、次第により富裕な階層も移動を余儀なくされたのではないかと考えられる[39]。

そうなると、新末、旱魃による飢饉を契機に各地で豪族の挙兵が相継ぐ中、淮北平野にはそうした動きが見えないのも、記録の欠落によるのではなく、挙兵の担い手となる豪族層がそれ以前に他所に移動し、淮北から去っていたためと考えられる。淮北平野において「営保」等が見られず、赤眉の急速・広範な「寇掠」や異常な孝心の逸話が見られ、劉永が十分に勢力を確立できなかったのも、みなそのためなのではなかろうか。

一方、河北平野はこの時期、黄河の洪水被害もなく、豪族勢力もそのまま残存しており、彼らの支持さえ得られれば勢力の拡大は容易であった。つまり、両漢交替期においては、淮北平野よりも河北平野の方が覇権を狙う者にとって有利な状況にあったのである。河北平野に拠ったがために劉秀は後漢王朝の創業者となり得たのであり、逆に淮北平野に拠ったがために劉永は滅んでいった、と言うのは極論に過ぎるであろうか。

おわりに

以上要するに、両漢交替期の淮北平野における、赤眉の急速・広範な「寇掠」、「営保」等の欠如、孝心により「賊」から解放された事例、劉永の敗亡、これらの背景には、黄河の洪水による豪族層の移動、それに伴う淮北平野の優位性の喪失が考えられる。それは一方で河北平野に拠る劉秀の覇権確立を促す要因の一つとなったのであり、両漢交替期の黄河の決壊は、旧政権の崩壊よりもむしろ後漢政権の成立過程に影響を与えた、といえよう。

もちろん、劉秀が後漢王朝の創始者たり得た要因が、当時の黄河の決壊による淮北平野の疲弊にのみあったはずはない。本稿は、従来周知のその他の経済的・社会的・政治的諸要因に加え、右のような一要因もあったのではないかという可能性を、わずかな史料をもとに類推を重ねることにより提示したに過ぎない。今後は出土史料や他の時代の史料を援用し、この仮説を補強していかなければなるまい。

さて、この時期に洪水被害を避けて淮北から移動したかに見える豪族層は、どこに行き、その後どうなったのであろうか。それを示す具体的な史料は、残念ながらない。[40] しかし、淮北の豪族が前後漢を通じて継続的成長を示し

ている以上[41]、彼らは後に再び淮北に帰ってきたと考えられる[42]。劉秀が黄河下流域を制圧した後も、彼らはすぐには帰らなかったらしい[43]。しかし、後漢王朝の体制が安定するにつれ、彼らは徐々に帰還し、後漢王朝に黄河の治水を迫ったようである。「県官は恒に佗役を興し、民の急（＝黄河の治水）を先にせず」（『後漢書』王景列伝）と王朝への怒りを表わし、王景の治水を促した「兗・豫の百姓」や、治水完成後、黄河周辺の土地利用に関して「濱渠の下田は貧人に賦与し、豪右をして固より其の利を得しむること無かれ」（同伝、明帝の詔）と警戒されている「豪右」こそ、淮北平野帰還後の彼らの姿なのではなかろうか。

註

（1）佐藤武敏「王景の治水について」（『中国水利史論集』、国書刊行会、一九八一所収）参照。

（2）拙稿「両漢交替期の黄河の決壊について」（『中国水利史研究』二六、一九九八）参照。

（3）Hans Bielenstein, "The Restoration of the Han Dynasty", *The Museum of the Far Eastern Antiquities*. Bulletin no. 26,1954.

（4）余英時「東漢政権之建立与士族大姓之関係—略論両漢之際政治変遷的社会背景—」（『新亜学報』一—二、一九五六）、土屋紀義「王莽滅亡の原因について」（『中国史における社会と民衆—増淵龍夫先生退官記念論集—』、汲古書院、一九八三）など参照。

（5）木村正雄「漢代における第二次農地の形成と崩壊」、「前後漢交替期の農民叛乱—その展開過程—」（ともに『中国古代農民叛乱の研究』、東京大学出版会、一九七九所収）。

（6）木村説に対する批判は、天野元之助「中国古代デスポティズムの諸条件—大会所感—」（『歴史学研究』二二三、一九五八）、増淵龍夫「中国古代ディスポティズムの問題史的考察」（『歴史学研究』二二七、一九五九）、西嶋定生「中国古代社会の構造的特質に関する問題点」（『中国古代帝国の形成と構造』、東京大学出版会、一九六一所収）、原宗子「いわゆる〝代田法〟の記載をめぐる諸解釈について」（『史学雑誌』八五—一一、一九七六）、藤田勝久「漢

代における水利事業の展開」（『歴史学研究』五二一、一九八三）など参照。

（7）以上の様子は『後漢書』巻一一劉盆子伝に見える。

（8）金発根「塢堡溯源及両漢的塢堡」（『中央研究院歴史語言研究所集刊』三七－上、一九六七）、土屋紀義「両漢交替期における豪族の動向－民衆叛乱への対応をめぐって－」（『続中国民衆叛乱の世界』、汲古書院、一九八三所収）を参照。土屋氏は『説文解字注』『説文通訓定声』等により、「営」とは「囲繞して居る」こと、「保」は「小城」であり、「営保」とは「四方を牆で取り囲んだ中に人々を住まわせて、安全な生活を送ることを保障せしめる施設」、「営壁」は「保壁」と連用される例から見て「営保」と「全く同一の実体を指す表現」、「営壍」は「堀割を掘って周囲をめぐらす施設」、「屯聚」の「屯」は「邨」に通じ、「城外に住居を構えていたことを意味」するとされている。他にも「保営」「保壁」等の表現がある（表1参照）が、こうしたさまざまな表記と、「とりで」の分布・担い手との対応関係は明らかでない。なお、これらの自衛施設は西晉末に数多く見られる「塢堡」等と同類のものらしい。「塢堡」等については那波利貞「塢主攷」（『東亜人文学報』二－四、一九四三）、金発根『永嘉乱後北方的豪族』（中国学術著作奨助委員会、一九六四）を参照。

（9）赤眉・五校をはじめ、銅馬・青犢・大搶・尤来・高湖・重連など当時の農民反乱諸集団の盛衰については、木村正雄「前後漢交替期の農民叛乱－その展開過程－」（『中国古代農民叛乱の研究』、一九七九所収）に詳しい。

（10）前掲註（8）土屋論文参照。

（11）木村正雄氏はこの『続漢書』の記事について、一般に農民反乱集団の渠帥が「三老」「巨人」などと称していたことを念頭に、「ここで大将とか持節光禄大夫とかいう称号を持っているのは農民叛乱の渠帥らしくない。あるいは、彼らは、魏郡・清河郡・東郡三郡の豪強たちであったかもしれない。」と推測された。そうすると五校は河北平野の在地豪族集団と連携していたことになる。いずれにせよこの「諸営保」が五校側のものであったことに変わりはない。

（12）新末諸反乱の嚆矢となった呂母集団の挙兵した故地に「呂母固」という地名が残っている。「固」は「とりで、まもり」の意であり、呂母集団も「営保」に類した施設に拠っていたものと解される。

（13）金発根氏は、「営保」等を築いた者の多くが「豪右」「大姓」であった中で、「只有虞延是普通人家、但做過亭長。」とされ、虞延の例が特異なケースであったことを強調され

ている（前掲註（8）の「塢堡溯源及両漢的塢堡」参照）。

（14）土屋氏はこの記事も「営保」等の例に含めておられる。しかしこれは豪族層による自衛施設の例ではない。また、この記事は「因呵賊曰、卿曹皆人隷也。為賊既逆、豈有還害其君者邪。嘉請以死贖君命。因仰天号泣。群賊於是両両相視、曰、此義士也。給其車馬、遣送之」と続く。つまり「賊」の同情により難を逃れたのであり、実力で県城を死守したのでもない。これは後述する淮北平野に散見する逸話と同類の史料であり、他の「営保」等の記事と同様の記事とはみなし難い。

（15）譚其驤主篇『中国歴史地図集』第二冊（繁体字版、香港三聯書店、一九九一）、一六頁・四三頁を参照。

（16）鶴間和幸「漢代豪族の地域的性格」（『史学雑誌』八七―一二、一九七八）参照。

（17）『後漢書』巻三九には、斉・琅邪・北海における類似の事例も見える。赤眉が「寇掠」した平野部における事例ではないため考察の対象から除いたが、これら全ての事例が黄河以南・淮河以北の地域に集中している点は確認しておきたい。

（18）前掲註（8）の土屋論文所収の書、四〇五頁～四〇六頁。

（19）樊崇らが最後に莒を囲んだ時の赤眉の数が「十余万」（『後漢書』劉盆子列伝）、その後淮北平野を「寇掠」し、更始帝に降り、離反して弘農郡まで進んだ時点の数が「乃分万人為一営、凡三十営」（同上）、つまり三〇万なので、途中の淮北「寇掠」期に勢力が減少したとは考えにくく、むしろ拡大したと考えるべきであろう。

（20）河北の劉秀・王郎、淮北（睢陽）の劉永、漁陽の彭寵、淮南・廬江（舒）の李憲、漢水中流（黎丘）の秦豊、長江中流（夷陵）の田戎、匈奴と結んだ五原の盧芳、天水の隗囂、武威の竇融、四川の公孫述など。

（21）農民反乱集団は必ずしも劉氏の復権を望んではいなかったとする見方もある（奥崎裕司「赤眉の反乱―「百姓思漢」について―」、『中国農民戦争史研究』六、一九八一）。しかし、王郎・廬芳が劉氏を詐称し、隗囂が「復漢」という年号を使った（『文物』一二六〇―一、一九七八、一〇頁）ことからもわかるように、覇権をめざす者には漢王朝復興は有効な建て前であったと考えられる。

（22）王昌一名郎、趙国邯鄲人也。……初、王莽簒位、長安中或自称成帝子子輿者、莽殺之。郎縁是詐称真子輿、……趙国大豪李育・張参等、……規共立郎。……（王郎）移檄州郡曰、……朕、孝成皇帝子子輿者也。……於是趙国以北、

遼東以西、皆従風而靡。（『後漢書』巻一二王郎列伝）

(23) それ以前の劉永については、「劉永者、梁郡睢陽人。梁孝王八世孫也。伝国至父立。元始中、立与平帝外家衛氏交通、為王莽所誅。」（『後漢書』巻一二劉永列伝）と見えるだけで、性格・言動についての記録は全くない。

(24) 昆陽の戦い（二三）ごろから劉秀に従っていた潁川出身の馮異・祭遵・銚期・臧宮・傅俊・王霸は当初から河北に同行した。しかし、「賓客従（王）霸者数十人、稍稍引去。光武謂霸曰、潁川従我者皆逝、而子独留」（『後漢書』巻二〇王霸列伝）とあるように、彼らの勢力も微弱なものであった。

(25) 特に赤眉に次ぐ規模の農民反乱集団である銅馬を吸収したことが、河北平定のみならず、その後の全国支配へと進む大きな契機になった。藤川和俊「銅馬賊と後漢軍団」（『中国古代史研究』七、研文出版、一九九七所収）を参照。

(26) 以上の経過は『後漢書』巻一光武帝紀上更始元年～建武元年条に詳しい。

(27) 木村正雄「劉永集団の形成と展開」（『中国古代農民叛乱の研究』、東京大学出版会、一九七九所収）、三七三頁参照。

(28) 張步・董憲が拠った劇県・東海郡（仮に郡治の郯県とする）の睢陽からの直線距離は、それぞれ約三八〇キロ・約二三〇キロとなる。

(29) 木村正雄「前後漢交替期の農民叛乱―その展開過程―」（『中国古代農民叛乱の研究』、一九七九所収、二六七頁）、前掲註（27）論文（同書所収、三八五頁）を参照。

(30) 前掲註（29）木村論文（『中国古代農民叛乱の研究』、二三四頁・三七三頁）を参照。

(31) 初陳留人蘇茂、為更始討難将軍、与朱鮪等守洛陽。鮪既降漢。茂亦帰命光武。因使茂与蓋延俱攻永。軍中不相能。茂遂反殺淮陽太守、掠得数県、拠広楽而臣於永。永以茂為大司馬淮陽王。（『後漢書』巻一二劉永列伝）

(32) 龐萌山陽人。初亡命在下江兵中。更始立、以為冀州牧、将兵属尚書令謝躬。共破王郎。及躬敗、萌乃帰降。光武即位、以為侍中。萌為人遜順、甚見信愛。帝常称曰、可以託六尺之孤、寄百里之命者、龐萌是也。拝為平狄将軍、与蓋延共撃董憲。時詔書独下延而不及萌、萌以為延譖己、自疑、遂反。（『後漢書』巻一二劉永列伝）

(33) 帝聞之、大怒、乃自将討萌。与諸将書曰、吾常以龐萌社稷之臣、将軍得無笑其言乎。老賊当族。其各厲兵馬、会睢陽。（『後漢書』巻一二劉永列伝）

(34) 史念海「釈『史記・貨殖列伝』所説的"陶為天下之

中」兼論戦国時代的経済都会」、「秦漢時代的農業地区」（ともに『河山集』第一集、三聯出版、一九六三）など参照。

(35) 旱魃と王莽政権崩壊との関係については前掲註（4）余英時論文を参照。

(36) 次のように史料に見える。

「更始即帝位、南面立、朝群臣。素懦弱、羞愧流汗、挙手不能言。」

「（長安入城時、）更始既至、居長楽宮、升前殿、郎吏以次列庭中。更始羞怍、俛首刮席不敢視。諸将後至者、更始問虜掠得幾何、左右侍官皆宮省久吏、各驚相視。」

「更始納趙萌女為夫人、有寵、遂委政於萌、日夜与婦人飲讌後庭。群臣欲言事、輒醉不能見、時不得已、乃令侍中坐帷内与語。諸将識非更始声、出皆怨曰、成敗未可知、遽自縦放若此。」

「軍帥将軍豫章李淑上書諫曰、……。更始怒、繫淑詔獄。自是関中離心、四方怨叛。」

（以上、『後漢書』巻一一劉玄列伝、傍線筆者）

(37) この議論については、今村城太郎「漢書溝洫志私考―古代中国の黄河対策とその周辺―」（『日本大学人文科学研究所紀要』九、一九六六）、薄井俊二「前漢末・王莽期の治水論をめぐる思想的諸問題―災異説と経書の実践化を中心に―」（『哲学年報』四七、一九八八）、前掲註（2）拙稿参照。

(38) 武帝期の決壊では決壊発生後一二年ほどしてから、七〇万人以上の徙民を余儀なくされるほどの大水災が発生した。拙稿（旧姓佐藤）「瓠子の「河決」―前漢・武帝期の黄河の決壊―」（『史滴』一四、一九九三）参照。

(39) 武帝期の黄河の決壊の際、二百万を超える流民が発生したが、その中には「惟吏多私、徴求無已、去者便、居者擾」（『漢書』巻四六万石君伝）とあることから推測できるように、先に移動した者の分の税負担を課され、それに耐えかねて逃亡した者も相当いたと考えられる。『塩鉄論』未通篇にも「刻急細民、細民不堪、流亡遠去。中家為之絶出、後亡者為先亡者服事」とあり、戦乱や災害時には直接被害だけでなく、逃亡者の分の負担を課されることで流亡に追い込まれる例が多かったことがわかる。その結果、ついには相当な有力者層まで移動を余儀なくされる場合も多かったであろう。両漢交替期の淮北平野もそうした状況にあったのではなかろうか。

(40) 両漢交替期の有力者層の移動の例はわずかながら存在する。

「任文公、巴郡閬中人也。……王莽簒後、文公推数、知当大乱、乃課家人負物百斤、環舎趨走、日数十。時人莫知其故。後兵寇並起、其逃亡者少能自脱、惟文公大小負糧捷歩、悉得完免。遂奔子公山、十余年不被兵革。」（『後漢書』巻八二方術列伝上〔任文公列伝〕）

「任延字長孫、南陽宛人也。……更始元年、以延為大司馬属、拝会稽都尉。……時天下新定、道路未通、避乱江南者皆未還中土、会稽頗称多士。」（『後漢書』巻七六循吏列伝〔任延列伝〕、以上傍線筆者）

いずれも戦乱を避けた移動であるが、那波利貞氏も前掲註(8)論文で指摘されたように、災害による有力者層の移動も当然あったであろう。特に任延伝には「多士」と称されるほどの勢力を保持したまま「中土」（中原）から会稽まで移動した一群の存在が見え、有力者層の大量移動を示す例として注目される。

(41) 前掲註(16)鶴間論文参照。

(42) 葛剣雄氏は、戦乱や自然災害による流民のうち、故郷で一定の資産と社会的地位を得ていた者は、後に帰郷する傾向が強いことを指摘されている（『中国移民史』第一巻、福建人民出版社、一九九七、二〇頁）。

(43) 『後漢書』王景列伝の浚儀令・楽俊の言によると、建武一〇年（三四）の段階で黄河下流南辺は、「今居家稀少、田地饒広」という状態であり、黄河の決壊を放置したままでも「其患猶可」と判断されている。

【付記】本稿は、一九九六年度中国水利史研究会での口頭発表の内容をもとに作成したものである。口頭発表の際には中国水利史研究会の諸先生方から貴重な御教示を多くいただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。